

拉致問題、首相の訪問、核やミサイルと日本海側の地方とその向こう岸とに注目が集まるこのごろである。そんな中で表日本、裏日本という言葉がふと思い出した。考えて見るとこれらを見聞きすることが少なくなって久しい。小学校、中学校での地理の時間には当たり前のように使っていたと記憶している。本来、19世紀末に地理用語として登場した言葉であり、さらにそれ以前には外日本（太平洋側）と内日本（日本海側）と呼んでいたそうである。日本海側と太平洋側との間にあるさまざまな社会的・経済的格差を感じさせるとして30年ほど前から使わないようにする動きがあったとのことである。確かに「裏」という字は「裏口」、「裏金」、「裏切り」等々マイナスイメージの言葉に使われることが多い。一説によるとこの字自体にはもともと悪い意味はなく、服の裏、内側を意味し、どちらかといえば中心に近いものを表していたとのことである。そう考えれば差別用語のような扱いをしなくてもよいのかも知れない。しかし、実際には東京を始めとする大都市の集中、したがって人口の集中、それに伴う経済文化の発達で太平洋側に“表”のイメージが強かったことは否めない。これに加えて日本列島の地理的条件から来る気候の特徴が日本海側に“裏側”のイメージを与えたことも事実であろう。表から裏に対してさまざまな“収奪”の構図があったとする告発的な著作もある。

確かに地理的条件は変えようがないし、様々な要因が重なり合った結果として前記のような構図が成立していたことも理解できる。しかし今や価値観が多様化し、これまでのマイナス要因をプラス要因として受け入れて活用しているケースも増えている。表と裏に関して真剣な議論があり、TVやラジオで“裏日本”の言葉がでると抗議の電話が集中した時代があったなどと誰も想像しなくなるのだろう。

表と裏問題に近いものに上りと下りがある。東北線でも東海道線でも、あるいは高速道路でも東京方面が上りで反対が下り方向という定義である。この場合にも東京から見て地方の方向が“下り”とは地方の蔑視であるとの議論を見聞きしたことがある。しかし、鉄道も道路もそれぞれ起点と終点の定義があり、上りと下りとは本来これに沿った定義である。つまり起点から終点の方向が下り、終点から起点への方向が上りである。何でも大正時代には国道を「東京市からXX府県庁所在地YYに達する道路」として政令に定めたそうで東京方面が全て上りであった。現在も各地の道路は起点、終点、重要な経由地をもって定義され、一般的には東京に近い都市や重要都市側が起点に選ばれるとのことである。この辺の手順に大都市偏重のにおいを感じる人がいるのは仕方がないかも知れない。しかし、起点と終点とが同格の場合には東側や北側を選ぶとのことなので全てこのやり方にすれば問題はないのにと感じる。

さて、今や我々にとってなじみの深い表と裏、上り下り問題は自分のパソコンとインターネットとの間にある。ADSLのように上りよりも下りが高速という非対称性

を前提とした技術によるサービスが成り立つのは、我々一般ユーザからの情報発信がまだまだ少ないからである。この上り下り格差に不満をもつユーザ数が圧倒的に増えればそれは光技術の本格的な出番を意味する。また、それは同時に各種の表裏格差、上り下り格差とそれを意識せざるを得ない気持ちが生み出すもやもやの解消に向けても大きな役割を果たすと考えられる。だが、一方で情報を発信する自由は両刃の剣である。世界中に散在する膨大なウェブサイトには、まさに人間社会の表から裏までのあらゆる情報が含まれており簡単にアクセスできてしまう。この簡単さが厳しい現実にはバーチャルな印象を与え、たいていのことには慣れてしまったような気にさせて感受性の低化を招く。あらゆる格差の解消は理想の一形態ではあるが、我々は確実にその代償を払っている。

追補 上と下 2017年

「上りと下り」に触れたなら、「上と下」にも触れるべきかと考えて追加してみた。

最近、「天地無用」の表示を見なくなった気がする。上下をさかさまにしてはならない荷物を運ぶときに、この言葉を表示したシールが貼ってあったものである。地球の巨大な重力によって地表に張り付けられて生きる我々には上下の位置感覚が刷り込まれている。しかし、その感覚がいかにローカルなものなのかは平素気にはしない。小さな地球の絵で、表面に人や動物、建物、などが円周に沿って描き込まれたものよく見かける。地球の反対側にいる人同士は互いに足を向け合っている。その通りなのである。ローカルな感覚で言えば、南極にいる人は逆さまにぶら下がっているし、南極の海は天井に張り付いている水なのである。

遠心力が地球の重力と釣り合うような条件の宇宙ステーションの内部では、無重量状態となって上下の位置感覚からは解放される。一方で、解放されずともこの感覚を手なずけてしまう人々が増えてきた。体操やスキー、スノーボードの選手たちである。彼らは空中での自分の姿勢を精密に把握する能力を磨くことで、まるで重力をあざ笑うかのようなふるまいをして見せる。翼を持たず、重力に張り付けられてきた人間も進化を始めたのだろうか？宇宙ステーションまでのツアーが採算に乗る時代は来るだろう。そうなればローカルな上下感覚を離れた新しい感覚が人類にも根付くかもしれない。

次のような写真も地球の裏を透視していると思えば  
それなりに眺められるものである。

